

歌川広重画「江都勝景」シリーズ —「名所江戸百景」へ至る都市の描写について

小 山 周 子*

目 次

- はじめに
- 1 本シリーズについて
- 2 「江都勝景」の大名屋敷
- 3 「江都勝景」から「名所江戸百景」へ
- おわりに

キーワード 江戸 上屋敷 都市風景 山田屋版「江戸名所」

はじめに

歌川広重は生涯にわたり、100を超える江戸の名所絵シリーズを手掛け、大小の単独作品も合わせると1500点ほどの江戸の風景を描いた。

数多くのシリーズのなかでも異色なのが、天保6～10年（1835～39）頃に、川口屋正蔵より出された「江都勝景」シリーズで、大名屋敷の外観をテーマとしたものだ。全7図で、その各図は、「桜田外の図」（画題となった大名藩邸上屋敷（以下同）彦根藩井伊家）、「日比谷外の図」（長州藩毛利家）、「山下御門之内」（佐賀藩鍋島家）、「虎之門外の図」（延岡藩内藤家）、「芝新銭座之図」（仙台藩伊達家）、「よろろの渡し」（田辺藩牧野家）、「大橋中洲之図」（磐城平藩安藤家）である。

筆者は、令和3年（2021）度特別展「富嶽三十六景への挑戦—北斎と広重」¹⁾を担当し、展覧会「第3章 新たな風景画への道—広重の挑戦と活躍」のなかで、本シリーズのうち5図を展示した。各図は建物や路上に見どころも多く、1図に1邸の大名屋敷をテーマとする広重の新しさを有するわりに、これまであまり紹介されてこなかった。大型画集の図版紹介などで部分的に解説が書かれてはきたものの、浮世絵の研究の中心として明確な扱いを受けたことはほほない。しかし、本シリーズは、寺社や盛り場を取り上げる他の名所絵シリーズとは明らかに一線を画す。建物や登場人物の描写は丁寧で、ある程度、実地により描かれたと推測される。そのような点において、広重と版元の意欲作と評価できる。広重の代表作「名所江戸百景」（安政3～6年）で見られる大名屋敷の描写は、本シリーズを源とした

*東京都江戸東京博物館学芸員

ものも見られ、一大シリーズの豊富な都市の描写に一定の貢献を果たしているともいえよう。

本稿では、シリーズ全体の資料紹介をまとめて行うとともに、都市風景のなかの大名屋敷の描写について、「名所江戸百景」へつながることを念頭に検討を行いたい。

1 本シリーズについて

当館では本シリーズのうち「芝新銭座之図」を除く計6図を所蔵する。その概要を下記【表1】の順番で紹介する。なお、当館が所蔵しない「芝新銭座之図」については、東京都立中央図書館所蔵作品により記述を進めていく。

【表1】「江都勝景」シリーズ

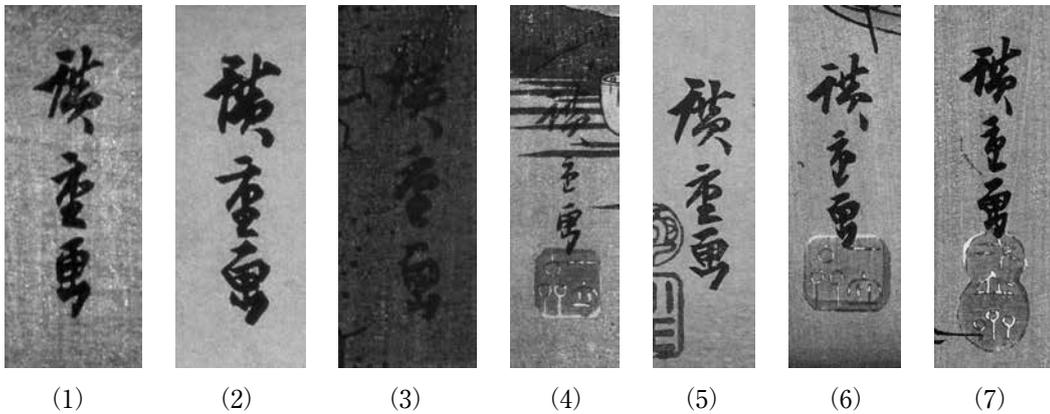
	作品名称 (資料名)	所蔵 (当館については資料番号)	寸法
(1)	江都勝景 桜田外の図	90203017	24.1×37.1
(2)	江都勝景 日比谷外の図	90203016	24.9×36.3
(3)	江都勝景 山下御門之内	98200193	24.2×36.7
(4)	江都勝景 虎之門外の図	90203018	24.1×37.1
(5)	江都勝景 芝新銭座之図	東京都立中央図書館所蔵	22.5×35.7
(6)	江都勝景 よろみの渡し	90203015	24.6×36.3
(7)	江都勝景 大橋中洲之図	90203019	23.8×35.9

当館所蔵の6図のうち、「桜田外の図」「日比谷外の図」「虎之門外の図」「よろみの渡し」「大橋中洲之図」の5図はまとめて平成2年度に、「山下御門之内」は平成10年度に、それぞれ購入により収集を行った。いずれも枠外の周囲の余白が裁断されサイズが小さく、一部は中折れも見られることから、制作の当時は画帖形式で売られたものと考えられる。

版元は川口屋正蔵で、本作品の刊行時には両国広小路に店があった。広重のいわゆる「一幽斎がき東都名所」と呼ばれる「東都名所」シリーズで知られる版元で、そのほか「京都名所」「浪花名所図会」などを刊行し、歌川国芳の代表作の一つ「里すゝめねぐらの仮宿」でも知られるが、嘉永5年(1852)4月に問屋株を恵比寿屋庄七に譲渡した²⁾。

シリーズ名の「江都勝景」は全て朱の題箋に白文で記され、字体は行書や隸書さまざまに変えている。題箋の位置は右または左に付与され、画帖形式を念頭に、例えば互い違いになるように置かれたものかもしれない。また目録なども刊行された形跡がないことから、各図の順番ならびに刊行の順番は不明である³⁾。当館のものも一枚ずつになった状態で収蔵保管される。江戸の「戸」は「都」の字が採用され、広重は別に「江都名所」(喜鶴堂版)などでも用いた例もある。勝景とはすぐれてよい景色のことを言い、古くから絵画でも用いられてきた言葉であるが、広重の画作では本シリーズにより初めて採用した。各作品名には、地域や場所を示す言葉が入るものの、藩邸名などは入れられておらず、直截的に示すのはやはり憚りがあったと推測される⁴⁾。

刊行の時期は、【図1】の各図の「広重画」落款の文字の崩し加減により、先行研究で示されるとおり天保6～10年頃と思われる。



【図1】

シリーズのうち、(4)「江都勝景 虎之門外之図」と(6)「江都勝景 よろゐの渡し」に「一立斎」の朱文方印が、(7)「江都勝景 大橋中洲之図」に「式立斎」の瓢箪型の白文印が押される。

本シリーズに関して浮世絵の先行研究での言及は決して多くない。広重研究の基本書である内田実『広重』⁵⁾のなかでは、

此画集は中年中期の作で、総べて大名屋敷を対象として描いてゐる。例へば『桜田外の図』の井伊邸、『虎之門外之図』の安藤邸、『よろゐの渡し』の牧野邸の如きである。大名屋敷を描いた関係上、直線を多分に用ひてゐることが、此画集の特徴となつてゐる。

とあり、「大橋中洲之図」と「芝新銭座之図」の2作品について解説が掲載される。同書巻末の「作画総目録」には、

角取短冊形枠内に外題あり。中に、松原堂との共板となれる図あり。

○大橋中洲之図 ○芝新銭座之図 ○よろゐの渡し ○日比谷外之図 ○山下御門之内 ○虎之門外之図 ○桜田外の図

と7図の各作品名も掲載がある。「松原堂との共板となれる図」については後述する。

図版が7図全て掲載されたのは、酒井雁高編『広重江戸風景版画大聚成』⁶⁾が初めてで、日本浮世絵博物館所蔵の全7図、後摺り等も含めた計11図の掲載がある。解説では、

色彩、構図ともに調和の取れた佳品。当初、全十枚を企画していたものであろうか。大名屋敷を画題としているように見える。そのため、奥行きを遠近を出す直線の構図になっている。各作品とも鮮

やかな色彩の調和が見事である。

と、シリーズの当初の目指された完成は10図であった可能性についても指摘がなされる。同書での図版掲載により、本稿で取り上げる当館所蔵作品との比較もでき、後摺りが出るほどの、ある程度の売れ行きがあったことが理解できる。

その他、一部の図版掲載とともに、大名屋敷が描かれた江戸名所絵のシリーズという文脈で、国立歴史民俗博物館編・発行『西のみやこ東のみやこ―描かれた中・近世都市―』等の展覧会図録⁷⁾でも紹介されてきた。

2 「江都勝景」の大名屋敷

本シリーズの各図について、尾張屋版江戸切絵図とともに描かれた地点や特徴を挙げてみたい。なお、ここで取り上げる切絵図は全て嘉永期に刊行されたもので、広重の作画よりも時代は下るが、辻番所の位置なども記され、その場所を知るうえで有益であるため掲載することとした。描かれた地点を地図上に矢印にて示す。



【図2】江都勝景 桜田外の図



【図3】外桜田永田町絵図 (部分) 86213115

(1) 「江都勝景 桜田外の図」

弁慶堀越しに彦根藩井伊家上屋敷の門を描く。その門前にあった辻番所と有名な井戸「桜の井」⁸⁾も描かれる。手前に堀沿いの道を歩くのは江戸見物に訪れた者と思われ、ちょうど豊後杵築藩の松平市正上屋敷前を差し掛かったところで、その門を見ているのだろうか。辻番所前の坂道の段差や、側溝など、実地にもとづくかと取れるような細やかな描写も見られる。

(2) 「江都勝景 日比谷外之図」



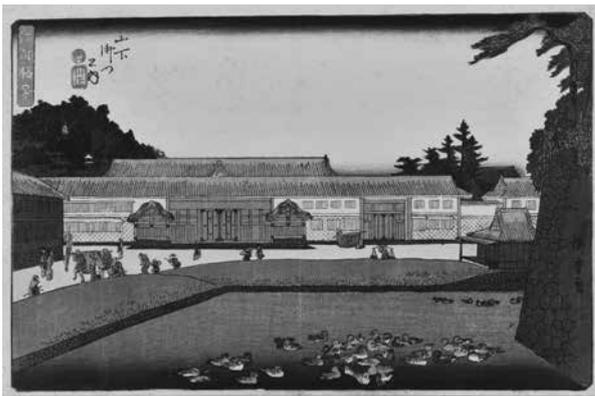
【図4】江都勝景 日比谷外之図



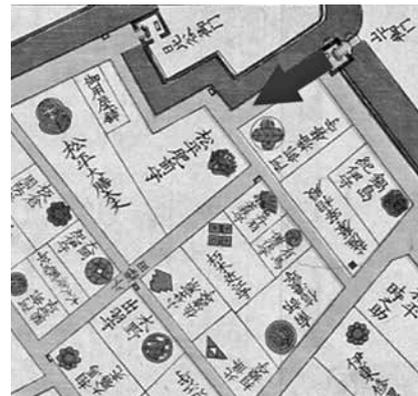
【図5】外桜田永田町絵図 (部分) 86213115

長州藩毛利家上屋敷の外観を通りから捉えた図。手前に辻番所、奥に日比谷御門が見える。通りには長鎗の稽古に通う子ども、御殿女中に奉公に上がる娘の姿も見える。

(3) 「江都勝景 山下御門之内」

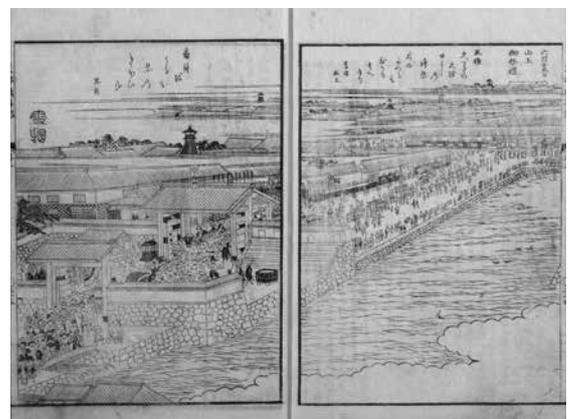


【図6】江都勝景 山下御門之内



【図7】外桜田永田町絵図 (部分) 86213115

御堀越しに佐賀藩鍋島家上屋敷の朱塗りの門と外観を描く。門前には辻番所、屋敷内の御用に訪れた人物を待つ籠かきの姿も見える。背後の木々が鬱蒼とした小高い丘は山王権現を意図したものかもしれないが、次章で扱うその後の同地の図様では遠望の富士山に変更されている。切絵図と比較すると御堀の角張った形状も正確に写しているようだ。なお、本地点については『東都歳事記』(天保9年刊)の長谷川雪堤画「六月十五日山王御祭礼」【図8】にも描かれるが、本シリーズと制作の時期としてもほぼ同じ頃で、広重が参照したかは不明である。

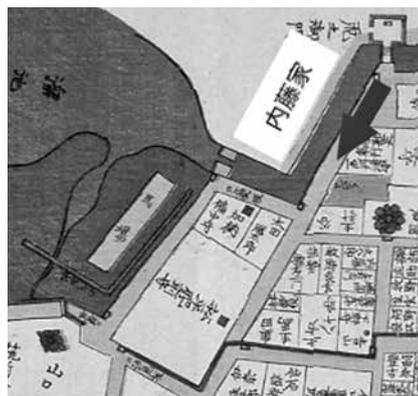


【図8】『東都歳事記』三「六月十五日山王御祭礼」83200318

(4) 「江都勝景 虎之門外之図」



【図9】江都勝景 虎之門外之図



【図10】芝愛宕下絵図 (部分) 96200115

御堀越しに延岡藩内藤家上屋敷の外観を描く。左奥の石垣の角に見えるのは、溜池の堰と考えられる。画面には描かれないが手前の道の奥には丸亀藩京極家上屋敷内の金毘羅大権現があり、そこからの参詣帰りの母娘の姿も見える。毎月10日の縁日の設定であろうか。その奥には参拝に向かうであろう前掛け姿の女性と、桶で亀を売る亀売りの姿も見える。

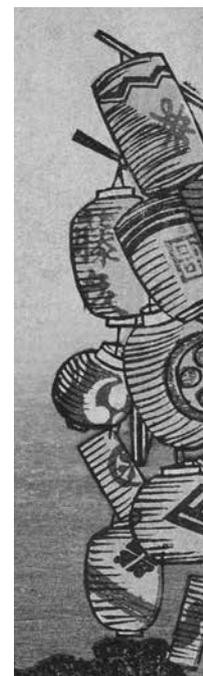
(5) 「江都勝景 芝新銭座之図」



【図11】江都勝景 芝新銭座之図
東京都立中央図書館所蔵



【図12】芝愛宕下絵図 (部分)
96200115



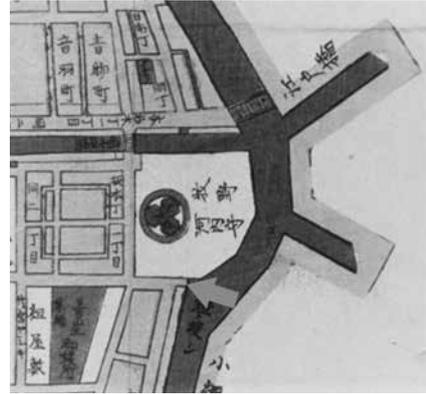
【図13】

作品名に芝新銭座とあるため、新銭座町により近い会津藩松平家中屋敷とする説⁹⁾もあったが、現在は仙台藩伊達家上屋敷と考えられている¹⁰⁾。通りには角兵衛獅子(越後獅子)の姿が見え、太鼓や笛を打ち鳴らす。その先には辻番所が見える。手前の提灯の一つには広重の印章の一つ「ヒロ」とともに「藤彦」の文字も見える【図13】。藤彦とは、版元の藤岡屋彦太郎(松原堂)かと想起させ、先行研究にて「松原堂との共板となる図」と指摘があった作品である。このような表示となったのは、洒落が効いた粋なあしらいにも思えるが、背景に何らかの刊行の事情があったのかもしれない。手前下に置かれた傘には「歌川」の文字が見え、このような仕掛けを広重は多くの作品で取り入れた。

(6) 「江都勝景 よろゐの渡し」

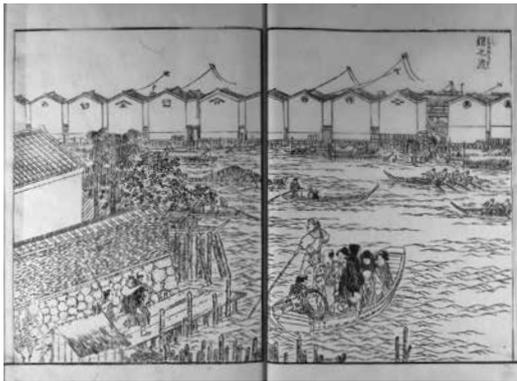


【図14】江都勝景 よろゐの渡し



【図15】八丁堀霊岸島日本橋絵図(部分)
86213108

鎧の渡しと田辺藩牧野家上屋敷の外観を描く。手前は日本橋川で物資を運ぶ往來の船が横切る。右奥には江戸橋が見える。本図とは渡しの反対の方向となる側から描くのが『江戸名所図会』の「鎧之渡」図【図16】で、広重も外堀の描写などで参考にした可能性はあるだろう。

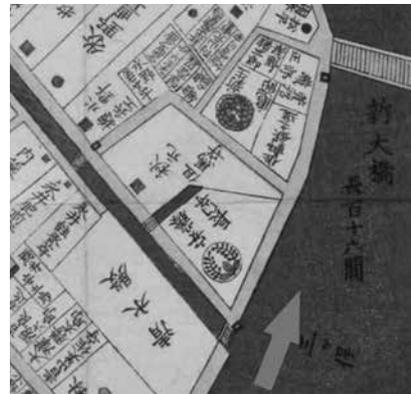


【図16】『江戸名所図会』1巻2冊「鎧之渡」
86200709

(7) 「江都勝景 大橋中洲之図」



【図17】江都勝景 大橋中洲之図



【図18】日本橋北神田浜町絵図(部分)
82101204

隅田川より、西岸の磐城平藩安藤家上屋敷門を見る。恐らく実景よりも判形に合わせて、横長に引き延ばされたような形状に描かれる。手前の洲は、中洲または川の分岐点であることから三派（三又・三つ股）とも呼ばれた地点で、安永期頃から歓楽街があったが、寛政の改革により取り壊され、芦の茂る浅瀬に戻った。浅瀬に苦勞しながら、米俵を積んだ帆船が川を進んでいる。右奥には上流側の新大橋が見える。

すでに指摘されるように全7図というのはシリーズとしては収まりが悪く、8図あるいは10図までは刊行の検討がなされていた可能性はあるだろう。その制作にあたっては大名屋敷の荘厳な外観を横大判でいかに変化をつけながら描いていくかに苦心がされているようにも見える。例えば、正面から描いた「桜田外の図」と「山下御門之内」の2図について、手前の堀の形を婉曲させるか、角張らせるか、実景通りの違いを際立たせ、仕上がりが同じようにならないようにしている。また、通りの人々の風俗にも、その場面に相応しい設定がつけられた。このような単調にならないような工夫を行うことは「東海道五拾三次之内」などでも見られ、多くの名所絵を手がけていた広重のもっとも得意とするところであった。

大名屋敷を描くという錦絵としては前例のない制作にあたり、恐らく広重は現地を訪れ、簡単な写生は試みた可能性はあろう¹¹⁾。さらに参考としたものとして、天保5年から7年に刊行された『江戸名所図会』、そして江戸の地図をも参照した可能性は高い¹²⁾。

刊行のねらいは、江戸土産の人気であった名所絵において、いかにも江戸の都市風景としての大名屋敷の表門や表長屋の外観がモチーフとして望まれたことや、土産の購買者層として国元より江戸に派遣された武士層なども念頭にあったことが想像される。本シリーズは後摺りの版も残ることから、一定の人気を得て、摺り増しが行われた。しかし版元側の事由によってか、やはり外観であってもいくつかの屋敷にて取り上げられることで差し障りがあったものか、いずれも定かではないがシリーズは7図にて終了した。

仮に全10図を完成の目途としていたのであれば、残りの3図には、第一に霞ヶ関の福岡藩黒田家と広島藩浅野家、第二に赤羽橋の久留米藩有馬家、第三に本郷の加賀藩前田家のいずれも上屋敷が候補として挙げられるのではなかろうか。この3地点については、広重の他の江戸名所絵でも取り上げられたからである。

3 「江都勝景」から「名所江戸百景」へ

天保6～10年頃に「江都勝景」シリーズを終えた後、広重は引き続いて多くの版元とともに様々な風景画シリーズの制作を行った。しかしいずれの江戸名所絵も寺社や繁華街、あるいは郊外の風光明媚な名所が中心で、大名屋敷を描くのは、【表2】のとおり、福岡藩黒田家と広島藩浅野家の間の霞ヶ関の坂、水天宮があった赤羽橋の有馬家藩邸、「江都勝景」でも取り上げた外桜田のみであった。つまり、この3地点については、広重の手により定番の江戸名所絵として普及していったと言えよう。

【表2】大名屋敷を取り上げた大判シリーズ作品（天保～嘉永期）

	シリーズ名・作品名（版元）
霞ヶ関 福岡藩黒田家・ 広島藩浅野家	東都名所 かすみか関（佐野屋喜兵衛版）
	江都名所 かすみかせき（佐野屋喜兵衛版）
	江戸名所 霞か関（藤岡屋慶次郎版）
	江戸名所 霞か関（丸屋甚八版）
	江戸名所之内 かすみかせきの図（丸屋甚八版）
	東都名所 霞か関夕景（布吉版）
	東都名所 霞かせきの図（山本屋平吉版）
	東都名所 霞か関山王祭練込之図（増田屋銀次郎版）
江戸名所 霞かせき（有田屋清右衛門版）	
赤羽橋 久留米藩有馬家	東都名所 芝赤羽根之雪（佐野屋喜兵衛版）
	東都司馬八景 赤羽根之夜雨（越前屋平三郎・和泉屋市兵衛版）
	東都名所 芝赤羽根水天宮（布吉版）
	江戸名所 赤羽根水天宮（有田屋清右衛門版）
江戸名所 赤羽ね水天宮（有田屋清右衛門版）	
外桜田 彦根藩井伊家	東都名所 外さくら田弁慶堀（佐野屋喜兵衛版）
	東都名所 外桜田弁慶堀桜の井（丸屋清治郎版）
	江戸名所 外桜田弁慶堀（有田屋清右衛門版）

特に多く手がけた霞ヶ関は、『江戸名所図会』でも「桜田御門の南 黒田家と浅野家との間の坂を云」¹³⁾とあり、浮世絵では山王祭の行列図で描かれることもあった。広重は坂を中心に配し、坂の上からあるいは下から黒田家と浅野家の上屋敷の両方を描く構図を採用した。大判三枚続の作品もあり、絵画としても人気があった場所とうかがえる。赤羽橋の久留米藩有馬家上屋敷には、文政元年（1818）に久留米の水天宮が勧請され、縁日などに一般の人々にも開放され、安産・子授けの人気の参詣地となった。

しかし、一方で「江都勝景」で描かれた風景のうち、外桜田以外の図様については取り上げられることもなく、まるで封印されてきたかのようともいえる。天保から嘉永期に刊行された横大判の江戸名所絵シリーズにおいては、霞ヶ関、赤羽橋、外桜田の地点から1か所または2か所程度を選択するラインナップが続いていき、それが広重の江戸名所絵として定型化していった。変化が生じたのは、嘉永6年からの山田屋庄次郎版「江戸名所」であり、安政3年からの「名所江戸百景」であった。山田屋版「江戸名所」は全44枚揃の横大判シリーズで、風景に人物を大きく配する特徴を有し、嘉永6年から7年に30図、安政3年に1図、5年に12図と断続的に広重が亡くなる年まで刊行が続いたものだ。江戸名所絵としては、「名所江戸百景」に次ぐ大型シリーズとなった¹⁴⁾。

【表3】は、「江都勝景」「江戸名所」（山田屋版・横大判）「名所江戸百景」の3つのシリーズにおいて描かれた大名屋敷をまとめたものである。山田屋版「江戸名所」の一部の作品について「名所江戸百景」よりも後に刊行されるものも含まれることは注意が必要であり、また、作品名が同じようであっても描かれた視点が異なり、大名屋敷が対象物として描かれていない作品もある。

【表3】 3つのシリーズで取り上げられた大名屋敷

	江都勝景 (川口屋正蔵)	江戸名所 (山田屋庄次郎)	名所江戸百景 (魚屋栄吉)
彦根藩井伊家	桜田外の図	外さくら田	外桜田弁慶堀糶町
長州藩毛利家	日比谷外之図	—	—
佐賀藩鍋島家	山下御門之内	すきやがしより日比谷外を見る 表註1)	山下町日比谷外さくら田
延岡藩内藤家	虎之門外之図	虎御門外金毘羅社葵坂 表註1)・表註2)	虎の門外あふひ坂 表註2)
仙台藩伊達家	芝新銭座之図	—	—
田辺藩牧野家	よろみの渡し	—	鎧の渡し小網町 表註2)
磐城平藩安藤家	大橋中洲之図	大橋中洲三つ俣	みつまたわかれの淵
福岡藩黒田家・ 広島藩浅野家	—	霞が関眺望	霞かせき
久留米藩有馬家	—	赤羽根水天宮 表註1)	増上寺塔赤羽根
加賀藩前田家	—	本郷の景	—

表註1) 安政5年(1858)3月刊行のため、いずれの図様も「名所江戸百景」よりも後の作画とみなす。
表註2) 大名藩邸周辺の地域を描くものの、描く視点や、対象物が大きく異なる。

【表3】の3シリーズの大名屋敷について、作画の変遷をまとめると、

- ① 江都勝景 → 江戸名所 → 名所江戸百景 の順
・彦根藩井伊家 ・磐城平藩安藤家
- ② 江都勝景 → 名所江戸百景 → 江戸名所 の順
・佐賀藩鍋島家 ・延岡藩内藤家
- ③ 江都勝景 でのみ描かれなかった
・霞ヶ関(福岡藩黒田家・広島藩浅野家) ・久留米藩有馬家
- ④ 江都勝景 でのみ描かれた
・長州藩毛利家 ・仙台藩伊達家 ・田辺藩牧野家
- ⑤ 江戸名所 でのみ描かれた
・加賀藩前田家

の5つのパターンがあるが、④と⑤については、安政5年9月に刊行途中のものも多くあるなか広重が亡くなったことを考慮する必要がある。仮に広重が存命で、そのまま順調に制作が進んだならば、「江戸名所」「名所江戸百景」ともに、より多くの大名屋敷のイメージが含まれた可能性も考えられる。例えば山田屋版「江戸名所」でのみ取り上げられた本郷の加賀藩前田家上屋敷【図19】については、広重は『絵本江戸土産』や単独作品でも描いており¹⁵⁾、まさに「名所江戸百景」に十分に含まれてよい地

点であった。

【表3】によれば、「名所江戸百景」全119図（1図は二代広重画）のなかで、わずか5邸の大名屋敷しか景観として描かれていないことがわかる。しかもいずれもが過去の江戸名所絵からの転用で、同シリーズにて新しく描き起こされた藩邸はない。「名所江戸百景 みつまたわかれの渚」【図20】でもわかる通り、広重は過去の作画を応用し、同シリーズの大きな特徴の一つである俯瞰的な視点にとらえ直している。各屋敷の外観は小さくまとめ、場面に登場する人物らの表情や仕草などの表現も抑制的である。「江都勝景」「江戸名所」などと比較すると、市井からの遠くなった距離感が垣間見え、それもまた還暦を迎え法体となった後に制作をはじめた「名所江戸百景」の持つ特徴の一つとうかがえるのである。こうした作画の変遷をたどっていくと、さかのぼって本シリーズ「江都勝景」は、途中で終了となったものかもしれないが、広重にとってもその後の礎となる一つの成果であり、作画の経験が画業において一定の貢献を果たしたといえるのである。

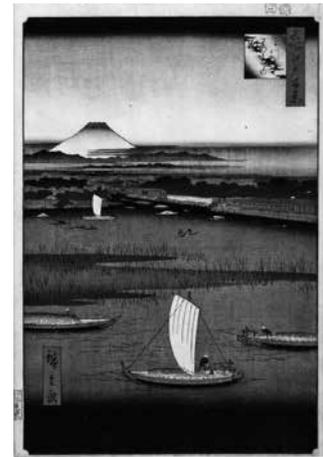
おわりに

本シリーズの一図「江都勝景 虎之門外之図」と同じ地点を、違った角度ではあるものの明治の小林清親が「虎乃門夕景」【図21】で描き出している。旧延岡藩内藤家の屋敷地には、工部省の下の工部寮工部学校（明治9年、工部大学校に改称）の校舎が建てられ、広重が描いた藩邸の石垣はそのまま転用された。本図あるいは同地の古写真と比較しても、広重が石垣の石組を正確に描こうとしたことがわかる。

広重没後に刊行された『富士見百図』の広重によるとされる序文のなかに「予がまのあたりに眺望せしを其儘にうつし置たる艸稿を清書せしのみ」と記載があるが、見て写したままを描くことを作画の基本としていたと強調する。これをそっくり鵜呑みにはできないことは数々の作例で図会などを参考にしたことの指摘がすでにある。しかし、本シリーズを制作するにあたり、街道や名所を描く他の風景画に比較して参考にできる資料は、そう多くなかったであろう。一方で、明治の小林清親が熱心に写生をできたような環境でもなければ、その技法も十分ではない時代にあった。そのようななかであって、实景を浮世絵の風景画へと見事に成立させた広重ならではの技量は、本シリーズでも遺憾なく発揮されたのである。



【図19】江戸名所 本郷の景
93201649



【図20】名所江戸百景
みつまたわかれの渚
83200068



【図21】虎乃門夕景 88208057

【註】

- 1) 令和3年(2021)4月24日(土)～6月20日(日)当館1階特別展示室にて開催、新型コロナウイルスの緊急事態宣言発出に伴い、4月25日(日)～5月31日(月)まで休止した。
- 2) 国立国会図書館所蔵『諸問屋名前帳』57巻50号
- 3) 本稿では、江戸城を中心としてその距離感から(1)から(7)の順番を暫定的に採用した。
- 4) 金行信輔「描かれた大名屋敷」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』(平成12年、東京大学総合研究博物館、pp.40-45)においても、同指摘がなされる。本稿を執筆するうえで大変参考にさせていただいた。
- 5) 内田実『広重』(昭和5年、岩波書店)P.315
- 6) 酒井雁高編『広重江戸風景版画大聚成』(平成8年、小学館)P.134
- 7) 『西のみやこ東のみやこー描かれた中・近都市ー』(平成19年、国立歴史民俗博物館)P.70
- 8) 『江戸名所図会』第3巻7冊に「桜が井 井伊侯の藩邸表門の前、石垣のもとにあり。亘り九尺ばかり、石にて畳みし大井なり。釣瓶の車三つかけならべたり」と、解説と図版の掲載がある。
- 9) 前掲5) 同書p.315の「芝新銭座之図」作品解説で、「大名屋敷は会津侯であらう」とある。
- 10) 石崎俊哉「仙台藩伊達家芝屋敷の形成と変遷ー沿岸域の大名江戸屋敷の造成ー」『江戸の大名屋敷』(平成23年、吉川弘文館、pp.93-127)に仙台藩伊達家江戸屋敷に関する調査研究が詳しく、広重が描いた屋敷正門が略式の冠木門である理由も文政7年火災によるとわかる。なお、令和3年現在、東京都港区東新橋1丁目の仙台市作成の「仙台藩芝口上屋敷(浜屋敷)跡」説明看板には広重による本図が掲載される。
- 11) 安政期頃のものとして推定されている広重の江戸名所写生帖が太田記念美術館に所蔵される。奥田敦子「広重の江戸名所写生帖と新発見の文書ー頼母子構御連名并仕様帳、相続構仕様帳、御住居仕様帳ー」『太田記念美術館論集3』(平成20年、pp.5-50)に全図が掲載される。
- 12) 『名所江戸百景』の制作において「嘉永改正府郷御江戸絵図」を参考とした可能性について、大久保純一「『名所江戸百景』考」『広重と浮世絵風景画』(東京大学出版会、平成19年)にて指摘がある。
- 13) 第3巻7冊に「霞関旧蹟 桜田御門の南、黒田家と浅野家との間の坂をいふ」とあり、両屋敷を含めた坂の図も掲載される。
- 14) 本論に直接関係する内容ではないが、当館所蔵の山田屋版江戸名所シリーズは画帖形式である。表紙に「江戸名所風景 一立齋広重画」の題箋が貼られる。石井研堂「廣重版畫目録大成」に「江戸名所風景(十九枚)」として刊行したものとあるが、当館所蔵は同じ画帖名ではあるがシリーズ中の20図が含まれる。
- 15) 『絵本江戸土産』第5編に「本郷通」の図がある。また「狂句合 本郷」(藤岡屋彦太郎・川口屋正蔵共版)、三枚続「東都本郷月之光景」(上州屋金蔵版)などがある。いずれも近景に通りの光景が描かれ、奥に前田家上屋敷外観が描かれる。